

いわむら一斎塾報

発行
NPO法人いわむら一斎塾
事務局 江戸城下町の館
〒509-7403
岐阜県恵那市岩村町317
TEL・FAX 0573-43-2506

只だ当に学は

これの為にするを

知るべし

(言志後録二一九条抜粋)

積意(名言録集より)

まさに学問することは、まずは自らのためにすることを深く強く認識し自覚することである。

「学問」は真に道理を「心」をもって学び、自らに問うことであり、「心」一魂を高め、「見識」、「胆識」ある教養人となること。

「憤」の一字は、是れ進学の機関なり。(言志録五条抜粋)

憤(発憤)意氣を奮い起すの一字は、これこそ学問を進める上で最も必要とされる原動力である。全て物事をなすにあたり、志を立て意氣を奮い立てて行動実践しなければならぬ。

「なせばなる／なさねば成らぬ／なに／ことも／成らぬは人の／なさぬなりけり」(上杉鷹山)。真の勇氣なしに何事も成就しない。

塾報の発行にあたり

NPO法人いわむら一斎塾
理事長 堀井 将成

佐藤一斎研究会の時から、NPO法人いわむら一斎塾に発展してまいりました。

常々諸事業に御理解くださり、御援助と御協力下さった方々と会員各位に心より感謝申し上げます。

「忠・孝・恕」の心は学問や理論ではなく、普遍的原理ではないでしょうか。最近人間が最も大切な根本的な原理を失い、親が子を殺害し、子が親を殺害するといった犯罪、企業家や公人の私欲優先で起る犯罪の絶えない今の日本の現実を思う時「子曰く親を愛する者は敢て人を悪まず、親を敬する者は敢て人を慢らず。愛敬に事うるに盡して、徳教百姓に加わり、四海に刑す、蓋し天子の孝なり。」孔子は言われた。

「親を愛する者は決して他人を憎むことはない。親を尊敬する者は決して一般の人々を侮ることをしない。愛と敬の思いで両親に尽

くす者であれば、その徳は人々に及んでいく。」この言葉を使命として、私達NPO法人いわむら一斎塾の活動が、少しでもお役に立てばと思います。

目先の事ではなく、五年、十年、五十年、百年先に、岩村の、恵那市内の今の子供達が、その子に、またその子とその子にと引継いでゆき、故郷の為、日本の為に役立つ人達が出る事を、祈念するものです。

いわむら一斎塾の源流

副理事長 鈴木 隆一

『美なる哉山河の固め岩村城。岩村藩出身の佐藤一斎と、この二つは岩村郷土の誇りである。私は縁有つて岩村町孔子祭の講師として招かれ、已に十五、六回岩村の地を踏んでいる。その度に感ずることは、文化財としての岩村城を持つ岩村町の素晴らしさ、人として前後比類の無い哲人一斎を持つ岩村郷の誇りである。』

岩村に入る度に思うことは、この哲人一斎の究明は、人に任せてはならぬ。岩村郷の人によって為されるべきであると。幸にその事が緒に就き、一昨年佐藤一斎研究会がこの地に生まれ、会長として山村氏が席に就いた。私はホツと

した。きつと素晴らしいものが育つと。

然るに残念なことに、幾何も無くして平成九年の初頭にお亡くなりになった。惜しみても余り有ることである。

先日岩村町の方からお便りをいただいた。曰く「岩村の佐藤一斎研究会は、毎回二十数名の方が出席され勉強されています。中津川、恵那、岐阜等からも車で来られています。何よりもうれしく有難かったです。山村さんのおかげで研究会が生まれ、やや方向が判りかけた秋に二十一世紀クラブの皆様のご厚意により、一斎の碑が建てられ、神渡先生の御筆による(少くして学べば...)の立派な碑を藩校知新館門横に建てて下さり、その折には既に一斎研究会ができていたということです。」(中略)

今回、発行されることになった会報は今までの会の歩みの記録が克明にされており、且つ年間に「言志四録」のどこを読んだかその箇所が記されている。

私が思うに一つの会が結成されるということは、ここに示されているような誠実な記録が必要である。会は「釈文を頼りに各々が自分の体験談を出し合つて、手探りの勉強を進めております」とのことですが、この研究が郷学の方向

であり進むべき勉強の有り方であり、郷学ということばは、安岡正篤先生が用いられましたが、岩村もこの研究会を郷学として、佐藤一斎の学徳のもと真剣に歩んでほしいと思います。

きつといいものが生まれて育つことと思ひ、それを念願して捫筆します。

平成十年三月二十一日
東都下馬周軒学堂

山崎 道夫

以上の玉稿は佐藤一斎研究会としては最初で最後になってしまった「会報」創刊号へお寄せいただいたものです。東京学芸大学の名誉教授など歴任され三年前に一〇〇歳の天寿を全うされましたが、岩村への温かい思いは最期まで尽きなかったと聞いております。

また、平成八年十月の「三学戒」を刻んだ佐藤一斎の顕彰碑の除幕式へ寄せられた詩人の坂村真民先生からの「二十一世紀の日本民族の志気を高揚させる言霊として、岩村から全国津々浦々へ伝播せんことを祈ります」とのメッセージも私たち地元の人として忘れてはならないものです。

「言志四録」を自分たちだけのものにせず、「人づくり心そだて」のために幅広い活動を通して今こ

そ必要とされている「戦後、忘れ去られてしまった社会や他人のために思いやりと譲り合いの温かい心呼び覚ます」ことができたらと研究会をNPO法人化し、更に前へ一歩踏み出すことにしました。「本物は続く。続ければ本物になる。」と云われます。

競争主義、成果主義、格差社会等々精神面に不快感を抱く人が増えて来ている今、「いわむら一斎塾」がめざすものを多くの人たちに知ってもらい一緒に活動してほしいと願っています。

江戸期の偉大な三先人に学ぶ 人・心・町づくりフォーラム

本年五月五日恵那市岩村町公民館大ホールにおいて、NPO法人いわむら一斎塾法人化記念事業として、「江戸期の偉大な三先人に学ぶ―人づくり心そだては町づくり―」フォーラムが開催され、予定以上六〇〇余の参加者により成功の内に閉幕した。

フォーラムの内容は、基調講演を作家で三先人の著作もある童門冬二氏が、「東海の偉大な三先人」を講題に講話、休憩の後「人づくり心そだては町づくり」をテーマに、鈴木正三の豊田市・鈴木公平

市長、細井平洲の東海市・鈴木淳雄市長、佐藤一斎の恵那市・可知義明市長、童門冬二氏の進行によるトークショー、又正三、平洲、一斎のオリジナル曲による薩摩琵琶の演奏が加わった。

当日は三市の社会教育、文化関係者、三先人の顕彰会関係者多数の参加があった。

その後二度の行政関係の協議もあり、又九月二十八日には東海市平洲記念館にて、豊田市鈴木正三顕彰会、柴田富信会長、豊田市足助町鈴木正三顕彰会、柴田豊副会長、東海市細井平洲顕彰の平洲会、蟹江嘉信会長、平洲記念館、立松



右より鈴木豊田市長、鈴木東海市長、可知恵那市長、作家童門氏

彰館長、恵那市岩村町佐藤一斎顕彰会、鈴木隆一会長、NPOいわむら一斎塾、堀井将成理事長、徳栞省允顕彰会特別会員が出席して、三先人の教えの普及、出版物の販促等、全般的な意見交換のために第一回協議会を開く。

官と民がそれぞれの立場から協働し、人づくり心そだてを中心とする三市の交流と研修、普及により交流人口が活発化することを期待する。(徳増記)



徳増 省允

「心は則ち、我に在るの一大活物なり」(言志叢録四七条抜粋)

心、「しん」と読めば魂のある心―真己は己れの有する最大の生きものである。限りなく成長可能な天から与えられた生命(いのち)であることに目覚めるべきである。そのことは「育てる」ことの大切さを認識し自覚すること。「心そだて」―魂を育て高めることが「人づくり」の根幹である。

「子を教うるの道は、己れを守るにあり」(言志晩録二二八条抜粋)



佐藤一齋翁座像 (恵那市岩村藩主邸跡)

子を教え育てるには、まず親や先生、大人達が自ら善行をもって年少者の手本となるよう生きることである。

大人達が全てにおいて改めなければ、大人の不善な行為行動は、即座にテレビや新聞、インターネットを通じて年少者のもとに届き、素直な心の中に受容され、やがて暗き影を落とし、その行為行動の上に姿をかえて現れてくる。

大人達が改め変ることなしに、子供達を改めさせ変えることは正に道理でない。

大人一人びとりが、真に学び自らに問うことが、「良知」(良心)を

とりもどして実践すること。これが先に為されるべきことであり、道理である。

「心(しん)」で氣づき、目覚めていないのが大人の世界である。

夜回り先生で有名な水谷修氏は「攻撃的な大人の社会、攻撃的で否定的な家庭と学校での教育のあり方にある」と指摘している。

又、その様な状況下で「自分は駄目な人間、自分なんていなくていいんだと自分を卑下し否定する」という。

大人達の攻撃性を生み、助長した原因は何か。

それは物質至上主義による比較と競争の社会原理、その先にある成果主義と勝ち負けへの執着から、自ずと生じた行為行動である。

その様な偏りのなかで、「心(しん)」を忘れ、余裕を無くし、情緒の乏しい己れが生じ、当然の如く、潤いのない渴いた世の中が生じ、良き世間がなくなっている。

家庭にも学校にも世の中にも「安心できる居場所」がなく、「依り所」を求めてさまよい、不安な今を生きている。

年少者一人びとりの「後ろ姿」をみよ。あまりにも「寂しい」のに氣付くであろう。

その姿は大人達の愚かさ勝手さに対する無言、無意識の警告を発し

ているのだと思う。

「目覚めよ大人達よ」。原点に立ち返り、真己になる為に、「教」天道を学び、「地」人道を学び、「教養」を身につける基本からはじめて精神の修養をなし、「人格」「人品」をそなえて、自らの品格をつくり、分相應に「世の為、人の為」に生きる。天命(使命・役割)を自覚し実践する。

使命に生きる時、天の時、地の利は一人びとりに力を与えてくれると確信する。

結果として「自らの為」であり、「幸いなる人生」であると思う。

下田歌子・女性教育論

桐井 雅康

東濃が生んだ女性の偉人は…？と尋ねられた時、きつと多くの方が、「明治の歌人、明治天皇家の

家庭教師、下田歌子先生」と答えられることでしょう。「女性教育の先駆者、下田歌子先生」と答えられる方もいらっしゃるかもしれませんが。

歌子先生の偉業について「有名な歌人、天皇家の家庭教師」であるという事は言うまでもないのですが、歌子先生の本当の偉業は、

この、「日本の女性教育」に取り組まれたことだと思います。

明治後期、国の代表として西欧を見て廻られた歌子先生は、「日本が西欧と肩を並べるためには、西欧の真似でないきちんとした日本人を育てる必要がある。きちんとした日本人を育てるには、家庭教育をしっかりとさせる必要がある。

だから、家庭を切り盛りする『女性』を育てない限り、日本は西欧に認められる国にはなれない。」そう強く感じて帰国され、全力で女性教育に取り組まれました。「実践女子学園」の創立はその取り組みの象徴でもあります。

現代、女性を育児から解放し、男女が平等に参加できる社会をつくろうという活動が広がっています。しかし、同時に、青少年による悲惨な事件が続発し、家庭教育の崩壊が大きな社会問題となっています。

育児は女性だけで行うのではなく、男性や家族、地域社会や学校といった、大人全員の責任であることはいうまでもありませんが、母親が育児の有りようを大きく左右することだけは、否定できない事実であります。

女性教育に関する歌子先生の著書は、家庭教育の崩壊といわれる現代にとつて、貴重な育児書でも

あります。

あります。歌子先生が書かれた明治の女子教育書から現代人が学ぶところは多いと感じます。

今、岩邑中学校の生徒と先生によつて歌子先生の名著「女子の修養」の現代訳本が制作されています。皆様のお目に触れる日も近いと思います。

時代は変わつても、子育ての本質は変わるものではありません。きつと歌子先生の著書は、我々現代人が忘れかけている「日本人のあり方」を考えるよい機会を与えてくれるものと思います。

* * *

講読会によせて

何処を見てもむつかしい言志四録と思つて読んでいたら思はずはつとした。「春風を以つて人に接し、秋霜を以て自ら肅む」の文である。本当にその様にと私の一番好きな語録の一文です。今では読むのが楽しみで、次々と読むではいろいろの想い、孫にも時々来ると言志四録を出して、此の所どう思うとか言つて意見を聞いたりして話のたねになつたりして一時を過ごせます。

木村麻利子

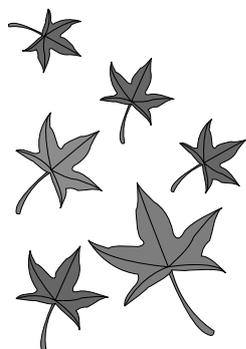
毎月の定例会は先ず全員が礼に始まり礼に終わります。言志四録を皆で素読して、皆さんの考え方を捉え方などを話し合つています。

一つの事でもそれぞれ意見あり大変勉強になり、かたよらない心で学ぶことの大切さを知りました。いつの世にも正しく常識ある判断力を養うためにも常に学び努力をすることが大切であると思います。

杉浦 敏子

佐藤一斎研究会に入り久しくなりましたが、学習の場での雰囲気は決して固苦しくなく、平日頃の生活の中に充ち溢れている様々な事疑問、悩み、迷い等を一斎先生の教えを基に様々な角度から意見を述べられ、話し合い、毎月の研究会の二時間は瞬く間に過ぎてしまふ程で、この良い機会を若い人に伝えたらと何時も思つて居ります。

鈴木喜代子



「いわむら一斎塾」がめざすもの

二十一世紀を生き抜く教養豊かな人材と指導者を養成するために、郷土が生んだ幕末の偉大な碩学佐藤一斎翁の教えを基本理念として、広く高い見地から多様な学習と修養の場作りに関する事業を行い、子どもから大人まで幅広い層に至るまでの「人づくり」「心そだて」及びそれを活かしたまちづくりの推進に寄与することを目的としています。

目的達成の取り組み

- (1) 佐藤一斎の教え（「言志四録」）を学ぶ定例学習会の開催
- (2) 郷土の先人や歴史に関する公開講座及びワークショップの開催
- (3) 各種団体等からの要請による郷土の先人に関する講師の派遣
- (4) 郷土の先人に関する情報誌・書籍の発行
- (5) 郷土の歴史や先人に関する書籍・論文・資料の収集
- (6) 郷土の先人の知恵を今に活かすイベント・フォーラム等の開催及び協力
- (7) 郷土の先人から学ぶ関係団体との研修会及び交流会の開催

一斎塾が取扱っている本のご紹介

- ・ 名言録集 五百円
- ・ おじいちゃんとおぼく 千五十円
- ・ 言志四録抄日捲り 七百元
- ・ 大人の寺子屋 六百元
- ・ 重職心得箇条 八百円
- ・ 生き方ルネッサンス 二千六十円
- ・ 佐藤一斎の思想 三百円
- ・ 佐藤一斎 三百円

〓 お知らせ 〓

言志祭協賛記念講演会
日時 十月二十八日（土）
午後七時より

・ 演題 志が人生を決める
― 言志四録を説く志―

・ 講師 神渡良平氏

特別講座

いわむら一斎塾ご案内

・ 日時 十二月二日（土）
午後一時三十分

・ 演題 「論語の楽しみ方」
・ 講師 愛知文教大学学長

坂田 新氏

あとがき

お陰様で創刊号をお届けできるようになりました。次号は来年四月発行する予定です。皆様方の一斎塾によせる思い、御意見等は非お寄せ下さい。部員一同心よりお待ちしております。（木村・杉浦・鈴木・成瀬・山口・徳増）